

第78回岐阜外科集談会

日時：昭和50年5月13日午後5時30分

場所：岐阜大学病院新外来棟4階講堂

1. 最近5年間における小腸悪性腫瘍の5例

岐阜市民病院外科

敷波 晃, 竹腰知治, 上松治隆

安藤 隆, 三輪 勝, 高井清一

伊藤隆夫, 田中子凱, 島田 脩

当科で最近5年間に小腸悪性腫瘍5例を経験したので報告する。組織診断は平滑肉腫4例, 悪性黒色腫1例, 計5例である。

20才台1例, 50才台1例, 60才3例である。男性3例, 女性3例であった。

これら5症例を報告し, 若干の文献的考察を加えた。

2. 家族性大腸ポリポージスの2例

岐阜大 第1外科

鬼東惇義, 滝谷博志, 馬場国男

岩島康敏, 安藤充晴, 後藤明彦

3. 銃弾による多発性消化管穿孔の1症例

養老中央病院外科

○名知光博 林 膝知 関野昌弘

岐阜大第1外科

村瀬 恭一

外傷の中ではまれな散弾による腹部・大腿部射創を経験した。腹部には2個の弾丸が穿通して19ヶ所の腸穿孔を認めた。穿孔部位は Debridement をおこない縫合閉鎖し, 多発性穿孔のある ileum 2ヶ所は約10cmの切除をおこなった。肝, 大血管その他致命的な臓器損傷はなかった。両側大腿部に計4ヶ所の射創を認め左大腿部にはポケット内の10円硬貨が弾丸とともにめりこんでいた。腹部穿通性損傷に対して日本では選択的保存主義がとられているが臓器損傷をみのがし患者を重篤におちいらせてはならない。患者は破傷風トキソイド, 抗毒素馬血清, 大量抗生剤 (10g~9g

/日), マテロイドの使用にて破傷風その他重篤な合併症をおこさず軽快した。

4. Curling Ulcer の1治験例

岐阜大第1外科

滝谷 博志

症例は4才の男児で, 約20%のⅡ度熱傷を受傷後, 5日後より大量の下血をきたし, 約3000mlの大量輸血を行ったが, 下血は軽快しなかった。下血より2日後, 緊急開腹術施行した。出血部位は十二指腸後壁の潰瘍で, 同部に直径約2mmの血管が露出し血液が噴出していた。これを止血し, ビルロートⅡ法による胃切除術を施行し, 術後は順調に経過し退院した。本症例はCurlingの報告した熱傷によるストレス潰瘍, すなわちCurling Ulcerと考えられ, 大量出血をきたすものは予後不良といわれている。我々はこれを救命することができたので報告した。

5. 開頭術後の消化管出血について

岐阜大第2外科

土屋十次, 日野輝雄, 山本 悟

大熊晟夫, 中条 武, 大橋広文

坂田一記

最近5年間に当教室で施行した開頭術は332例で, そのうち術後タール便等を排出し消化管出血を疑わしめた症例は8例(2.4%)であった。原疾患は頭部外傷2例, 脳動脈瘤3例, 脳腫瘍2例, 脳動静脈奇形1例である。手術時間は平均7時間, 輸血量(術中)は平均1600mlであった。消化管出血の発症時期は, 8例中7例が術後1週間前後以内であった。又, ステロイド剤の投与量の多少と消化管出血とは相関性に乏しかった。発症せる消化管出血に対し, 術後安静を要する時期であり, 胃十二指腸透視は2例にしか施行しなかったが, 両者に胃潰瘍を確認した。又, 輸血・止血剤等投与により, 短期日でこれらを止血し得たので, 胃

切除を要する症例はなかった。

6. バルサルバ洞動脈瘤破裂の1治験例

国立療養所岐阜病院外科

石原 浩, 小林君美, 井上律子
加藤康夫, 中納誠也, 山里有男

バルサルバ洞動脈瘤はその発生病理については諸説がありまだ結論の出していない疾患であるが、その診断および治療についてはこれまでも十分な検討がなされている。最近我々も本症の1例を経験し外科的に治療せしめたので、若干の考察を加え報告する。症例は23才の男子で小学校時代より心雑音を指摘されていたが20才頃より心悸亢進を来すようになったという。大動脈造影を行い右冠動脈弁にバルサルバ洞動脈瘤の破裂を認め開心術を行った。バルサルバ洞動脈瘤はⅡ型であり肺動脈弁の直下に約1cmのⅠ型VSDを認めた。動脈瘤の腱帯部にU字縫合をかけて破裂孔を閉鎖し、VSDもプレジット付両端針で直接閉鎖した。術後経過良好で退院時のアンギオでも異常は認められない。

7. 心局所冷却法の臨床的検討

国立療養所岐阜病院外科

中納誠也, 小林君美, 井上律子
加藤康夫, 山里有男, 石原 浩

開心術時の心筋保護手段としての心局所冷却法について、自験例18例の手術成績、合併症、その実施法について分析し、動物実験の成績をも合せ、次の様な結論を得た。

心局所冷却法は、個々の症例について、十分適応を考慮して用いると、開心術時の有力な心筋保護手段であり、心内操作も極めて容易となる方法であるが、心冷却温度、血流遮断時間、心復温など、まだまだ検討しなければならない問題があり、今後更に改良されるものと考えらる。

8. Double Aorto-Coronary Saphenous Vein Bypass Grafts の2成功例

千手堂病院

附属岐阜心臓血圧センター

初音嘉一郎, 横須賀達也, 初音三重子

最近、我々は Tripple disease, 所謂冠動脈主要3枝に病変のみられる狭心症の2例を経験し、これに各々右冠動脈、左前下行枝と大動脈間、及び左前下行枝、廻施枝と大動脈基部との間に伏在静脈片による2本のバイパス定設術, double aorto-coronary saphenous vein bypass grafts に成功したので若干の考察を加へ報告した。

9. TIA を合併した Primitive hypoglossal artery の1例

大雄会第一病院

山森積雄, 坂井 昇

岐阜大学第2外科

山田 弘

T. I. A. と舌下神経不全麻痺を伴った primitive hypoglossal artery の1例を経験したので報告した。患者: 60才, 女子, 小児期に T. I. A. があり, 左乳癌摘出後1年目頃から頭痛を訴えて来院した。現在 T. I. A. の訴えはなかったが, 舌が右方へ偏位し軽度の舌萎縮が認められた。脳波では右頸動脈圧迫時, 一過性に右半球及び左後頭葉を中心に5~6c/sの徐波が出現した。右頸動脈写にて内頸動脈より分枝する primitive hypoglossal artery が発見され, これは舌下神経管を通り下塚で脳底動脈と吻合していた。左頸動脈写で cross circulation は良好なるも, post. com. A. は造影されず, 左椎骨動脈写にて両側の P. I. C. A. のみが造影された。右椎骨動脈は造影されなかった。その他脳血管の異常は認められなかった。舌下神経管撮影にて右7×9mm 左5×5mmと右舌下神経管の拡大を認めた。

10. 悪性シュワン細胞腫の1例

岐阜県立岐阜病院外科

渋谷智顕, 須原邦和, 三尾六蔵
阿部達彦, 川迫堯之, 伴 邦充

症例は37才, 女性, 幼少時より全身にレックリングハウゼン氏病あり約2年前右頸部に無痛性腫瘍に気付く某病院で同腫瘍の部分切除を受け, 組織学的に神経線維腫の診断を得た。術後約1ヶ月目より同部の腫瘍の増大傾向を認め, 最近特に腫瘍の増大傾向強く疼痛を伴うようになり, 腫瘍は右鎖骨窩より右頸部にまでおよぶ直径約13cm×17cmの卵型の腫瘍となり本院へ入

院切除した。肉眼的には被膜を有する固い充実性、剖面は灰白色で周囲組織との癒着が強かったが、ほぼ全摘した。組織学的検査により悪性シュワン細胞腫で術後直ちにリニアック照射を行い経過観察しているが、局所再発、肺その他への転移を術後2ヶ月現在認めない。本症について若干の文献的考察を加えて報告する。

11. 本院における痛風症例

松波病院外科

松浦昭吉，太田吾郎，松波英一
和田英一，吉田敏生

昭和48年5月より昭和49年12月までに20例の痛風を経験したので報告した。

33才の男性，白血球に貪食された尿酸結晶を証明した例。

65才の女性，心疾患にてイノシン製剤の注射と投薬をうけた後，通風を発症した例について述べた。

最近食改善に伴う生活環境の向上によって痛風症例は増加しているので，痛風を念頭において診断にあたる事を強調した。

12. 神経管外転移を来した頭蓋内腫瘍の3例

岐大第2外科

大熊晟夫，広瀬 旭，坂井 昇
樫木良友，山田 弘，坂田一記

岐大第1病理

笹岡 郁乎

岐大第2病理

加藤俊彦，宮下剛彦

県立下呂温泉病院外科

鈴木貞夫，河合寿一

頭蓋内原発の腫瘍が神経管外に転移を起すことは極めて稀なことで，われわれの集計では現在迄に世界で252例が報告されているにすぎない。われわれは最近3例を経験したので文献的考察を加えて報告する。症例1：8才男児，松果体腫瘍，原発巣は良性奇形腫，悪性脳室上衣腫および胎児性癌より成り立っていた。胎児性癌は神経管内転移の他両肺，膀胱および膝に転移していた。症例2：34才女性，斜台部髄膜腫，両肺および肺門リンパ節に転移していた。症例3：33才女性，右前頭葉多形性神経膠芽腫，両肺，全脊柱，頸

部，肺門，傍大動脈リンパ節に転移していた。

13. 睾丸類上皮嚢腫の1例

岐大泌尿器科

鄭 漢彬，嶋津良一，河田幸道

睾丸の類上皮嚢腫は極めて稀な疾患であり，最近その1例を経験したので報告する。症例は19才男子，昭和50年4月8日，左陰嚢内の無痛性腫瘍を主訴として本院受診。

右睾丸，左右副睾丸には異常を認めず，左睾丸の腫瘍は小指頭大であった。

左睾丸腫瘍を疑い4月14日に左除睾術を施行した。腫瘍は被膜により被われた径1.5cmの腫瘍で左睾丸の中央部実質内に存在した。

組織診断にて類上皮嚢腫と診断した。自験例を含め，我々の調べた範囲の39例について統計的観察を行った。

14. 膀胱弁による女子尿道形成術の追試例

岐大泌尿器科

栗山 学，堀江正宣，河田幸道

原発性女子尿道癌の手術手技の1つに，尿道全摘後，膀胱弁を用いた尿道形成術があるが，従来の方法では，術後の機能に種々の問題があった。前回，共同演者の堀江が報告した横切開による膀胱弁作製法は，術後尿失禁などの問題を生ずる事なく，良好に経過したので，今回更に，1症例を加えたので報告した。

患者は63才の農婦で排尿終末時痛を主訴として来科したものであり，プローベで，扁平上皮癌と診断され，遠隔転移のない事を確認した上で，尿道全摘術兼膀胱弁による尿道形成術及び両側のソケイリンパ節郭清を施行した。摘出標本には，腫瘍細胞は認められなかった。術後経過は順調で，頻尿と膀胱容量の減少の他は，術前と同じ膀胱尿道機能を保持している。

以上より，この術式は，尿道内に限局せる尿道癌には，充分賞用できる方法だと考えられた。

15. 尿道外傷に対する尿道形成術の経験

岐大泌尿器科

野村恭博，土井達郎，坂 義人
西浦常雄